

ビル・エモット著「なぜ国家は壊れるのか イタリアから見た日本の未来」

PHP 研究所 2012年8月22日刊を読む

なぜ国家は壊れるのか イタリアから見た日本の未来

1. (1) イタリアは第二次世界大戦後、数十年間はダイナミックな成功を収めたが、今や硬直的でその経済成長は停滞している。むしろ、長期的衰退期に入っていると言っても過言ではない。人々は、これが永久に続くのではないかと懸念している。
 - (2) 将来を予見することは誰にもできないが、日本の経済成長が停滞し、生活水準の低下が永久に続くとは考えていないように、イタリアの衰退が永久的であるという真の理由は見つからない。
 - (3) 両国とも起業家精神と創造力があり、知識集約型経済のリーダーとして、生産性を急速に伸ばす可能性を十分に持っている。だが、それを成就するには、多大な努力と見解の一致が必要なのである。
-
2. 高齢化社会は経済の足かせか
 - (1) 日本と同じく、イタリアでは高齢化が進んでいる。日本のように若い女性が結婚や子供を産むことを望まず、出生率が低下する一方で、イタリア人の平均寿命は延びている。
 - (2) ただ、日本と違うのは、移民を許容していることで、イタリアの人口が増加していることだ。1990年以前、イタリアは移民を認めなかった。だが、1990年代の旧ユーゴスラビアの内戦と、北アフリカの貧困と政情不安の影響、さらにルーマニアやブルガリアなど旧共産圏国がEU(欧州連合)に加盟し、そこから何百万人もが西欧に移住した。
 - (3) その結果、イタリア全人口のうち、外国で生まれた人の割合は、ほとんどゼロから7%に増加したのである。ということは、全人口6000万人の中には、400万人の移民が含まれていることになる。
 - (4) 多くの移民は、教育を十分に受けておらず、仕事にも熟練していないので、イタリア経済の活力に資するところはまだ少ない。彼らの起業家精神が発揮されるのは、数十年後だろう。熟練度が増せば、重要な起業家の新戦力になるものと思われる。
 - (5) ただ懸念すべき傾向は、イタリアの大学新卒者の10%近くが、より良い就職口と機会、収入を求めて海外に移住していることだ。
 - (6) しかし私は、日本の場合と同じく、この人口統計学的な説明に納得できないのだ。たとえ高齢化社会であっても、スウェーデンのように、経済力が強い国がある。また、ドイツを含めた他のヨーロッパ諸国も同じ高齢化の傾向を示しているものの、経済はうまく運んでいる。したがって、他の理由があるはずなのだ。
 - (7) 私はこの3年間、本書の調査と、イタリアに関するドキュメンタリー映画を製作しながら、この解答を探し求めた。

(8) 読者は本書を読めば、なぜイタリアが現今の窮地に陥ったかがお分かりいただけると思う。さらに日本に、イタリアと共通する問題や障害があることにも気づかれるはずだ。というのも、本書中でたびたび両国を比較しているからである。

3. 共存する“グッド・イタリア”と“バッド・イタリア”

- (1) 本書の最重要ポイントは、イタリアで起きた困難な状況を理解することだ。すなわち、2007年に始まった世界金融と経済の危機、それに2008年のリーマン・ショックはイタリアに大打撃を与えた。さらに17カ国からなるユーロ圏の政府債務問題が、2010年にギリシャとアイルランド、ポルトガルの債務超過をきっかけに、経済規模のより大きなイタリアやスペインの借入コストに影響を及ぼし始めたことである。
- (2) 世界金融危機は、日本にも打撃を与えたが、イタリアと日本の両国とも、すでに2008年以前から困難に直面していたのだ。日本はバブルが崩壊し、イタリアは1992年の政府債務と通貨危機によって、1990年代にそれぞれ経済危機が発生しており、リーマン・ショックの衝撃を両国とも受けやすかったのである。その当時の困難な状況は、近年よりもはるかに深刻で長期にわたるものだった。
- (3) 第1章でこの状況を説明しているが、さらに、日本の問題を調べているうちに考えついた、私の理論にも基づいている。
- (4) それは、日本と同様に、イタリアにはダイナミックで進歩的な開かれた力があり、それを私は“グッド・イタリア”と呼んでいる。反面、利己的かつ閉鎖的で、保守的な力があり、彼らはときには腐敗や犯罪行為を行っているので、これを私は“バッド・イタリア”と呼んでいる。
- (5) この“グッド・イタリア”と“バッド・イタリア”は、いつも共存してきた。1960年代は“グッド・イタリア”がより強力だったが、1990年以来“バッド・イタリア”がより強力となり、優勢となっている。

4. 反対勢力に勝ったトリノの成功

- (1) 第2章では、イタリアの経済成果とその問題点を分析し、グッドとバッド、イタリアの両方の力が、何で構成されているかを説明している。
- (2) 主として、次の2つの問題が起きたと思う。労働組合と有力企業やビジネス分野からなる特権団体の力と、一部の政治グループの力が増大していたため、彼らがイタリアの改革を妨害するようになったことだ。
- (3) さらに日本と異なる、イタリア独特の歴史的背景があると思う。1970年代、イタリア国内は分裂対立し、激しいストライキや労働争議に見舞われた。そこで政府は、労働者を過度に保護する労働法を制定せざるを得なくなり、そのため、労働力は極めて硬直的で融通性のないものになった。同時に、1970年代、極左と極右の政治グループが銃撃したり、爆弾を投げるテロ行為を行ったのだ。
- (4) ドイツもその10年間、左翼によるテロ行為に悩まされた。有名なバーダ・マインホーフ・グループが銀行家や実業家を誘拐したり殺害し、ドイツだけで28人も犠牲になった。日本もまた、国際テロ組織、赤軍派が、航空機をハイジャックしたり、世界各地で残虐行為を行っている。

- (5) イタリアでは“赤い旅団(ブリガテ・ロッソ)”や“永久の闘争(ロッタ・コンティニュー)”などのグループが、右翼テロリストや、ときにはマフィアと組んで、1970年代の政治的混乱時に400人超を殺害している。
- (6) その労働争議と政治的混乱の結果から、イタリア政府は1970年代と1980年代に、公共支出で事態の鎮静化を図った。
- (7) 寛大な公的年金制度を導入し、公共事業関連の職を多く創出することで、事実上、反対勢力を買収しようとしたのである。そのためイタリア政府は、膨大な負債を抱えるようになった。
- (8) 日本では、バブルとその崩壊が原因となり、財政赤字問題が起きたが、イタリアでは政治危機が財政赤字の増大を引き起こしたのである。
- (9) 両国とも経済危機に伴う改革に対し、保守主義や反対勢力の抵抗があるのは共通しているが、それにもかかわらず、希望を持たせる実行可能な実例がある。そこで、暗い話題の第2章の後、第3章ではイタリア第3の大都市、トリノが成就した野心的な事例を述べることにした。
- (10) トリノは古い工業都市で、言うなればイタリアのデトロイトだ。同市は150年前にイタリア統一を実現した政治運動発祥の地であり、トリノの成功は極めて刺激的である。バッド・イタリアが残っているにもかかわらず、グッド・イタリアは実際に存在していることをトリノは示している。
- (11) 私は、一国におけるサクセス・ストーリーが確認でき、それから教訓を得たなら、次のステップは、これを他国へ広げて希望を持たせ、残されているエネルギーを解放させるべきだと思う。

5. 革新的な知的集約サービス業の創出

- (1) 第4章と第5章では、阻害要因であるバッドに対し、明るい可能性のグッドを対比させながら分析している。
- (2) ここではビジネスに重点を置き、成長が緩慢な西欧国、イタリアにおいて、何が企業成長の障害になっているかを考察している。つまり、企業が地球規模で成功を収めるのと、失敗あるいは失望する違いは、何が原因で起こるのかを考えている。その分析とケース・スタディーを読むことによって、日本における進歩への障害に相当するものが、何であるかを考えてほしいのだ。
- (3) また第5章で、イタリアにおけるさらなる成長への可能性と、新たなダイナミズムが実際に存在していることがお分かりいただけると思う。イタリアには過去から革新的なデザインと、卓越した製造技術があるだけでなく、優秀な科学や創造的産業があり、将来への可能性を秘めた多くの兆候があるのだ。
- (4) このイタリアの可能性を知ることによって、日本の可能性についても考察できると信じる。なぜなら、イタリアと同様に、日本の今後の大きな可能性は、製造業を活性化し革新的に進歩させることだけでなく、それ以上に、革新的な知的集約サービス業を創出することにあるからだ。
- (5) イタリアと日本の両国では、製造業は経済活動の小部分しか占めていない。適切に測るなら、それは経済活動のわずか約15～20%しかなく、他の80～85%はサービス業である。サービス業にこそ最大の進歩を見出さなければならない。

6 . 衰退に抵抗し、再生に努力する国家

- (1)最終章は、イタリアが変革する見込みについて分析しており、その中に改革が必要な最重要分野を列記している。
- (2)この改革の仕方について、日本との類似点もあるが、もちろん相違点もある。たとえば、イタリアの司法制度で直面している問題や、組織暴力団への対処、法治主義の軽視などは、日本には見られない。
- (3)だが、経済活動における競争と革新の欠如、深刻な財政赤字問題、そして最も創造的で現代的な知的集約分野の遅れなどの課題は、日本と同じである。
- (4)もちろん、イタリアが多くの挑戦を克服できるかどうかは予測できないが、それを実現することを期待し、励まさなければならない。イタリアは 14 世紀と 15 世紀のルネサンス期に現代資本主義の基礎を作り、科学や芸術上の驚異的な革新を行っている。レオナルド・ダ・ヴィンチは、科学や芸術分野で、依然極めて刺激的な存在である。
- (5)さらに、もしイタリアが永久に衰退するなら、西欧諸国も同じ運命をたどることになるだろう。なぜなら、その大半はダイナミズムが欠如し、過度の保守主義と利益団体の強い影響を受けているからだ。
- (6)日本だけでなく、アメリカやイギリスも、衰退に抵抗し、再生に努力するイタリアに目を向けなければならない。イタリアを見習うことによって、自国の経済や政治、それに社会上の課題を解決できるのである。

P8 ~ 17

[コメント]

経済的な困難、経済危機からの脱却をイタリアがどう図ろうとしているのか。1つ1つの論点ごとに、日本をこよなく愛するビル・エモット氏がイタリアの取り組みを紹介し、日本の奮起を促している。3年間かけてイタリアを調査し書き上げた本書は、イタリアの取り組みを紹介しながらも、世界が様々な課題にどうチャレンジしたらよいかの示唆を与えるための著作と確信する。わかりやすい翻訳なので、是非全文の読破を。

- 2012年9月4日林 明夫記 -